

日蓮大聖人御書全集

なかおきのにゆうどうししょうそく

中興入道消息

新版
1766
S
1771

なかおきのにゆうどうしようそく

中興入道消息

こうあん ねん がつ にち

弘安 2 年 ('79) 11 月 30 日 58 歳

なかおきのにゆうどうふさい

中興入道夫妻

がもくいつかんもん おく た そうら お みようほうれんげきよう

鵜目一貫文、送り給び候い了わんぬ。妙法蓮華経の

ごほうぜん もう あ そうら お

御宝前に申し上げ候い了わんぬ。

にほんこく もう くに しゅみせん みなみ いちえんぶだい

そもそも、日本国と申す国は、須弥山よりは南、一閻浮提

うちじゆうこうしちせんゆじゆん うち はちまんしせん くに

の内縦広七千由旬なり、その内に八万四千の国あり。いわ

ごてんじく じゆうろく たいこく ごひやく ちゆうこく じっせん しょうこく

ゆる、五天竺、十六の大国、五百の中国、十千の小国、

むりよう ぞくさんこく みじん しまじま くにぐに みな たいかい

無量の粟散国、微塵の島々あり。これらの国々は皆、大海の

なか いけ 木 葉 散

中にあり。たとえば、池にこのはのちれるがごとし。

この日本国は大海の中の小島なり。しおみては見えず、ひ

にほんこく たいかい なか こじま 潮満 み 干

ればすこしみゆるかの程にて候いしを、神のつき出ださせ

少 見 ほど そうち かみ 筑 い

給いて後、人王のはじめ、神武天皇と申せし大王おわしま

たま のち にんのう 初 じんむてんのう もう だいおう

しき。それよりこのかた三十余代は、仏と経と僧とはま

ひと かみ ぶつぼう

しまさず。ただ人と神とばかりなり。仏法おわしまさねば、

じごく 知 じょうど 願 ふぼ きようだい 別

地獄もしらず、浄土もねがわず。父母・兄弟のわかれあり

つゆ 消 にちがつ

しかども、いかながなるらん、ただ露のきゆるように、日月

隠 たも 打 思

のかくれさせ給うようにうちおもいてありけるか。

にんのうだいさんじゅうだいきんめいてんのう もう だいおう ぎよう

しかるに、人王第三十代欽明天皇と申す大王の御宇に、

この国より戌亥の角に当たつて百濟国と申す国あり。彼の

くに くに 聖 いぬい すみ あ 名 おう もう おう おう こんどう しゃかぶつ もとけ

国よりせいめい王と申せし王、金銅の釈迦仏と、この仏の

と たま いたさいきよう もう 書 読 そう 渡

説かせ給える一切経と申すふみと、これをよむ僧をわたし

てありしかば、 仏と申すものもいきたるものにもあらず、

経と申すものも外典の文にもにず、 僧と申すものも物はい

えども道理もきこえず、 形も男女にもにざりしかば、 かた

がたあやしみおどろきて、 左右の大臣、 大王の御前にして

とこう僉議ありしかども、 多分はもちうまじきにてありし

かば、 仏はすてられ、 僧はいましめられて 候いしほどに、

ほとけ 捨 そう 禁 そうら

せんぎ たぶん 用

怪 驚 そう だいじん だいおう おんまえ

きよう もう げてん ふみ 似 そう もう もの 言

どうり 聞 かたち なんによ 似

えども道理もきこえず、 形も男女にもにざりしかば、 かた

がたあやしみおどろきて、 左右の大臣、 大王の御前にして

とこう僉議ありしかども、 多分はもちうまじきにてありし

かば、 仏はすてられ、 僧はいましめられて 候いしほどに、

ようめいてんのう

みこ

しょうとくだいし

もう

ひと

敏

達

にねんにがつ

用明天皇の御子・聖徳太子と申せし人、びだつ二年二月

じゅうごにち

ひがし

む

なむしやかむにぶつ

とな

おんしやり

十五日、東に向かつて南無釈迦牟尼仏と唱えて、御舍利を

みて

い

たま

どうろくねん

ほけきよう

どくじゆ

たも

御手より出だし給いて、同六年に法華経を讀誦し給う。

それよりこのかた七百余年、王は六十余代に及ぶまで、

漸

ぶつぼう

広

そうら

にほん

ろくじゆうろつかこくふた

しま

ようやく仏法ひろまり候いて、日本、六十六箇国二つの島

至

くに

くにぐに

こおりこおり

ごうごう

さとさと

むらむら

にいたらぬ国もなし。国々・郡々・郷々・里々・村々に、

どうとう

もう

てらてら

もう

ぶつぼう

じゆうしよ

じゆうしちまん

堂塔と申し、寺々と申し、仏法の住所すでに十七万

いっせんさんじゆうしちしよ

にちがつ

明

ちしや

よよ

一千三十七所なり。日月のごとくあきらかなる智者、代々

ぶつぼう

広

しゆしやう

輝

賢

人

くにぐに

に仏法をひろめ、衆星のごとくかがやくけんじん、国々に

じゅうまん

充滿せり。

ひとびと

じぎよう

しんごん

ぎよう

かの人々は、自行には、あるいは真言を行じ、あるいは

はんにや

にんのう

あみだぶつ

みようごう

般若、あるいは仁王、あるいは阿弥陀仏の名号、あるいは

かんのん

じぞう

さんぜんぶつ

ほけきようどくじゆ

観音、あるいは地蔵、あるいは三千仏、あるいは法華経読誦

もう

むち

どうぞく

勸

しおるとは申せども、無智の道俗をすすむるには、「ただ

なむあみだぶつ

もう

たと

によにん

おさなご

儲

南無阿弥陀仏と申すべし。譬えば、女人の幼子をもうけた

掘

川

独

るに、あるいはほり、あるいはかわ、あるいはひとりなる

はは

はは

もう

聞

付

必

たじ

には、『母よ、母よ』と申せば、ききつけぬればかならず他事

捨

助

なら

あみだぶつ

をすててたすくる習いなり。阿弥陀仏もまたかくのごとし。

われ おさなご

あみだぶつ はは

じごく

穴

がき

我らは幼子なり。阿弥陀仏は母なり。地獄のあな、餓鬼の

堀 落 い

なむあみだぶつ

もう

おと

ほりななどにおち入りぬれば、南無阿弥陀仏と申せば、音と

ひび かなら きた

救 たも

いつさい

響きとのごとく、必ず来つてすくい給うなり」と、一切の

ちじん おし たま

わ にほんこく

もう

習

智人ども教え給いしかば、我が日本国かく申しならわして、

とし 久 そうろう

年ひさしくなり候。

にちれん ちゆうごく みやこ もの

へんごく

しようぐん

しかるに、日蓮は中国・都の者にもあらず、辺国の將軍

とう しそく

おんごく

もの

たみ

こ

そうぢ

等の子息にもあらず、遠国の者、民が子にて候いしかば、

にほん こく しちひやくよねん

いちにん

とな

そうら

日本国七百余年に一人もいまだ唱えまいらせ候わぬ

なんみょうほうれんげきょう

とな

そうろう

みなひと

ふぼ

南無妙法蓮華経と唱え候のみならず、皆人の、父母のごと

にちがつ

しゆくん

渡

ふね

かつ

く、日月のごとく、主君のごとく、わたりに船のごとく、渴

みず

飢

はん

おも

そうろうなむ

して水のごとく、うえて飯のごとく思つて候南無

あみだぶつ

むけんじごくごう

もうそうろう

じき

阿弥陀仏を、「無間地獄の業なり」と申し候ゆえに、食に

いし 炊

岩 石 うま

跳

わた

石をたいたるように、がんせきに馬のはねたるように、渡り

おおかぜ ふ きた

聚 落 たいか 付

に大風の吹き来るように、じゆらくに大火のつきたるよう

敵 寄

遊 女

后

に、にわかにかたきのよせたるように、とわりのきさきに

驚

嫉

妬

そうろう

い

なるように、おどろき、そねみ、ねたみ候ゆえに、去ぬ

けんちようごねん しがつ にじゆうはちにち

いまこうあん にねん じゆういちがつ

る建長五年四月二十八日より今弘安二年十一月まで

にじゆうしちねん

あいだ

たいてん

もう

強

そうろう

つき

満

二十七年が間、退転なく申しつより候こと、月のみつる

潮 差

にちれん

いちにんとな

がごとく、しおのさすがごとく、はじめは日蓮ただ一人唱え

そちら み ひと あ ひと き ひと みみ 塞 まなこ

候いしほどに、見る人、値う人、聞く人、耳をふさぎ、眼

怒 くち 顰 て 握 齒 嚙 ふぼ

をいからかし、口をひそめ、手をにぎり、はをかみ、父母・

きょうだい ししよう 善 友 敵 のち ところ じとう りようけ

兄弟・師匠・ぜんうもかたきとなる。後には所の地頭・領家、

のち いっくく 騒 のち ばんにん 驚

かたきとなる。後には一国さわぎ、後には万人おどろくほ

ひと くち 真 似 なんみようほうれんげきよう 唱

どに、あるいは人の口まねをして南無妙法蓮華経ととなえ、

あつく しん に とな

あるいは悪口のためにとなえ、あるいは信ずるに似て唱え、

謗 に とな にほん

あるいはそしるに似て唱えなんどするほどに、すでに日本

こくじゆうぶん いちぶん いっこうなんみようほうれんげきよう くぶん

国十分が一分は一向南無妙法蓮華経、のこりの九分は、あ

りようほう

疑

いつこうねんぶつしや

るいは両方、あるいはうたがい、あるいは一向念佛者なる

もの ふぼ 敵 しゆくん

しゆくせ

者、父母のかたき、主君のかたき、宿世のかたきのように

旬 そんしゆ ごうしゆ ぐんしゆ こくしゆとう

むほん もの

ののしる。村主・郷主・郡主・国主等は、謀叛の者のごと

怨

くあだまれたり。

もう

たいかい

う

ぎ

かせ

したが

さだ

かくのごとく申すほどに、大海の浮き木の風に随つて定

きようもう

こくう

上

じようげ

めなきがごとく、軽毛の虚空にのぼりて上下するがごとく、

にほんこく 追

歩

とき

打

とき

日本国をおわれあるくほどに、ある時はうたれ、ある時は

禁

とき

きず

被

とき

おんる

いましめられ、ある時は疵をこうぶり、ある時は遠流、あ

とき

でし

殺

とき

打

追

る時は弟子をころされ、ある時はうちおわれなんどするほ

どに、去ぬる文永八年九月十二日には御かんきをかぼりて、
い ぶんえいはちねんくがつじゅうににち ご 勘 氣 被

北国佐渡の島にうつされて候いしなり。
ほつくくさ ども しま 移 そうち

世間には一分のとがもなかりし身なれども、故
せけん いちぶん 失 み こ

最明寺入道殿・極楽寺入道殿を地獄に墮ちたりと申す
さいみょうじのにゆうどうどの じごく お もう

法師なれば謀叛の者にもすぎたりとて、相州鎌倉竜の口と
ほっし むほん もの 過 そうしゅうかまくらたつ ぐち

申す処にて頸を切らんとし候いしが、科は大科なれども
もう ところ ぐび き そうち とが たいか

法華経の行者なれば左右なくうしないなばいかんがとや
ほけきょう ぎょうじや そう 失

おもわれけん。また、遠国の島にすておきたるならばいか
思 おんごく しま 捨 置

にもなれかし、上ににくまれたる上、万民も父母のかたきの
かみ 憎 うえ ばんみん ふぼ 敵

思

どう

くに

殺

ようにおもいたれば、道にてもまた国にても、もしはころす

餓

死

充

か、もしはかつえしぬるかにならんずらんとあてがわれて

ほけきよう

じゆうらせつ

おん 恵

ありしに、法華経・十羅刹の御めぐみにやありけん、ある

てん 失

由

ご 覽

しま

いは天とがなきよしを御らんずるにやありけん、島にて

怨

もの

おお

なかおきのじろうにゆうどう

もう

ろうにん

あだむ者は多かりしかども、中興次郎入道と申せし老人

ありき。

か ひと

とし 経

うえ

こころ

賢

み

楽

彼の人は、年ふりたる上、心かしくく身もたのしくて、

くに

ひと

ひと

思

ひと

ごぼう

故

国の人にも人とおもわれたりし人の、「この御房は、ゆえあ

ひと

もう

しそくとう

厭

憎

る人にや」と申しけるかのゆえに、子息等もいとうもにくま

いげ もの 大 旨 かれ ひとびと げにん
ず、その已下の者ども、たいし彼らの人々の下人にてあり

ないない 過

しかば、内々あやまつこともなく、ただ上の御計らいのま

みず にご

澄 つき くも 隠

まにてありしほどに、水は濁れどもまたすみ、月は雲かくせ

晴 理

とが

頭

どもまたはるることわりなれば、科なきことすでにあらわ

言

虚

故

れて、いいしこともむなしからざりけるかのゆえに、

ごいちもん

しよだいみよう

許

由 もう

御一門・諸大名はゆるすべからざるよし申されけれども、

さがみのかみどの

おんはか

許

そうら

上

相模守殿の御計らいばかりにて、ついにゆり候いてのぼり

ぬ。

にちれん

にほんこく

だいいち

ちゆう

もの

かた

並

ただし、日蓮は日本国には第一の忠の者なり。肩をならぶ

ひと せんだい

こうだい

おぼ

る人は先代にもあるべからず、後代にもあるべしとも覺えず。

ゆえ

い

しょうかねんちゆう

おおじしん

ぶんえいがんねん

だいちようせい

その故は、去ぬる正嘉年中の大地震、文永元年の大長星の

とき ないげ ちじん

ゆえ

占

故

時、内外の智人、その故をうらないしかども、なにのゆえ、

しゅつたい

もう

知

いかなることの出来すべしと申すことをしらざりしに、

にちれん いっさいきようぞう

い

かんが

しんごん

ぜんしゆう

ねんぶつ

日蓮、一切経蔵に入つて勘えたるに、真言・禅宗・念仏・

りつとう

ごんしょう

ひとびと

ほけきよう

軽

律等の権小の人々をもつて法華経をかるしめたてまつる

ゆえ

ぼんてん

たいしゃく

おん

答

にし

くに

おお

つ

故に、梵天・帝釈の御とがめにて、西なる国に仰せ付けて

にほんこく

責

勘

こさいみようじのにゆうどうどの

進

日本国をせむべしとかんがえて、故最明寺入道殿にまい

そつり

しよどう

もの

痴

笑

らせ候いき。このことを諸道の者おこづきわらいしほどに、

くかねん過

い

ぶんえいごねん

だいもうここく

にほんこく

九箇年すぎて、去ぬる文永五年に大蒙古国より日本国を

襲

由 ちようじよう

合 ゆえ

おそうべきよし牒状わたりぬ。このことのある故に、

ねんぶつしや

しんごんしとう

怨

うしな

れい

念仏者・真言師等、あだみて失わんとせしなり。例せば、

かんど

げんそうこうてい

もう

みかど

おんきさき

じようようじん

もう

漢土に玄宗皇帝と申せし御門の御后に上陽人と申せし

びじん

てんかだいいち

びじん

ようきひ

もう

美人あり。天下第一の美人にてありしかば、楊貴妃と申す

后

ご 覽

ひと

おう

わ

覚

きさきの御らんじて、この人、王へまいるならば、我がおぼ

劣

せんじ

もう

掠

ふぼ

きようだい

えおとりなんとて、宣旨なりと申しかすめて、父母・兄弟

流

ころ

じようようじん

牢

をば、あるいはながし、あるいは殺し、上陽人をばろうに

い

しじゆうねん

責

入れて四十年までせめたりしなり。

これ似もそれそうろうにて候。日蓮にちれんが勘文かんもんあらわれて、
頭かしら

だいもうここく じようぶく にほんこく勝 ほつし にほん

大蒙古国を調伏し、日本国かつならば、この法師は日本

だいいち そう われ いとく 衰 おも

第一の僧となりなん。我らが威徳おとろうべし」と思うか

ざんげん 知 かれ 言 葉

のゆえに讒言をなすをばしろしめさずして、彼らがことば

もち くに ほろ れい にせいおう

を用いて国を亡ぼさんとせらるるなり。例せば、二世王は

ちようこう ざんげん りし うしな ちようこう

趙高が讒言によりて李斯を失い、かえりて趙高がために

み 滅 えんぎ みかど 時 平 大 臣 ざんげん

身をほろぼされ、延喜の御門は、しへいのおとどの讒言に

かんしようじよう うしな じごく 墮 たま

よりて、菅丞相を失って地獄におち給いぬ。これもまた

ほげきよう 敵 しんごんし ぜんしゆう りっそう

かくのごとし。法華経のかたきたる真言師・禅宗・律僧・

じさい ねんぶつしやとう もう おんもち にちれん 怨 たも
持齋・念仏者等が申すことを御用いありて、日蓮をあだみ給

故

にちれん

卑

たも

ほけきよう

うゆえに、日蓮はいやしけれども持つところの法華経を、

しやか

たほう

じつぽう

しよぶつ

ぼんてん

たいしやく

にちがつ

してん

りゆうじん

釈迦・多宝・十方の諸仏・梵天・帝釈・日月・四天・竜神・

てんしやうだいじん

はちまんだいぼさつ

ひと

まなこ

惜

しよてん

天照太神・八幡大菩薩、人の眼をおしむがごとく、諸天の

たいしやく

敬

はは

こ

あい

守

帝釈をうやまうがごとく、母の子を愛するがごとく、まぼ

重

たも

ほけきよう

ぎようじや

ひと

ばつ

たも

りおもんじ給うゆえに、法華経の行者をあだむ人を罰し給

ふぼ

敵

ちやうてき

おも

たいか

おこな

うこと、父母のかたきよりも朝敵よりも重く大科に行い

たも

給うなり。

きへん

こじろうにゆうどうどの

みこ

しかるに、貴辺は故次郎入道殿の御子にておわするなり。

ごぜん

嫁

こころ

賢

ひと

こ

御前はまたよめなり。いみじく心かしこかりし人の子と

嫁

こにゆうどうどの

跡

継

こくしゆ

おんもち

よめとにおわすればや、故入道殿のあとをつぎ、国主も御用

ほけきよう

おんもち

ほけきよう

ぎようじや

いなき法華経を御用いあるのみならず、法華経の行者を

養

たま

年

々

せんり

みち

送

迎

い

やしなわせ給いて、としどしに千里の道をおくりむかえ、去

おさなご

娘

ごぜん

じゆうさんねん

じようろく

卒塔婆

立

ぬる幼子のむすめ御前の十三年に丈六のそとばをたてて、

おもて

なんみようほうれんげきよう

しちじ

あらわ

その面に南無妙法蓮華経の七字を顕しておわしませば、

ほくふう

なんかい

鱗

かぜ

当

たいかい

く

北風吹けば南海のいろくずその風にあたりて大海の苦を

離

とうふう

せいざん

ちようろく

かぜ

み

触

ちくしよう

はなれ、東風きたれば西山の鳥鹿その風を身にふれて畜生

どう

免

とそつ

ないいん

う

道をまぬかれて都率の内院に生まれん。いわんや、かの

卒塔婆 ずいき

て

まなこ

み

そうろうにんるい

そとばに随喜をなし、手をふれ眼に見まいらせ候 人類を

かこ

ふぼ

か

くどく

てん

にちがつ

や。過去の父母も彼のそとばの功德によりて天の日月のごと

じょうど

照

こうよう

ひと

さいし

げんぜ

いのち

く浄土をてらし、孝養の人ならびに妻子は、現世には寿を

ひやくにじゅうねんたも

ごしやう

ふぼ

りやうぜんじやうど

詣

百二十年持つて、後生には父母とともに靈山浄土にまいり

たま

みず澄

つき

映

鼓

打

響

給わんこと、水すめば月うつり、つづみをうてばひびきのあ

思

そうら

とううんぬん

のちのち

るがごとしとおぼしめし候え等云々。これより後々の御そ

ほけきやう

だいもく

あらわ

たま

とばにも、法華経の題目を顕し給え。

こうあんねんつちのとうじゅういちがつさんじゅうにち

みのぶさん

にちれん

かおう

弘安二年己卯十一月三十日

身延山

日蓮

花押

なかおきのにゆうどうどののにようぼう

中興入道殿女房